

日中学芸交流の三旗手伝（上）

一言文研客員研究員との交友録一

水 澤 利 忠

私は言語文化研究所の研究員として、その実を挙げる為に、何人かの客員研究員のお力を借りて共同で研究を続けてきた。その経緯を略記して感謝の微意を表したい。

一 『史記疏證』と劉起釭教授

先ず第一に、中国社会科学院歴史研究所の劉起釭教授を挙げなければならぬ。

私は昭和61年（文教大学に赴任した年）10月8日筑波大学に於ける日本中国学会において、静嘉堂文庫に所蔵する十万巻旧蔵「史記疏證」が同文庫の「漢籍目録」に、清、沈欽韓撰とあり、又「漢書疏證合刊」60巻とあるのは誤認であることを指摘し著者は杭世駿であることを提唱した。

この「史記疏證」は同目録にも「写」とある通り写本である。しかも撰者の氏名を欠くのである。何故、それを目録に「清 沈欽韓撰」と誤認したのであろうか。恐らくはこの書が「漢書疏證」と合綴されていることから、或いは同じ「漢書疏證」という著述がある沈欽韓と速断して誤認を招くことになったのではあるまいか。

沈欽韓には「漢書疏證」「後漢書疏證」の著はあるが、「史記疏證」の著はない。沈氏の「漢書疏證」は、光緒26年浙江書局刊本が世に行われてい

るが、それは36巻本である。同文庫「漢籍目録」に、

漢書疏證 36巻 (有缺) 清 沈欽韓撰 清光緒26刊

とある。同文庫には、別本の「漢書疏證」がある。目録にいう。

漢書疏證 (史記疏證合刊) 27巻 清 沈欽韓撰 写

これすなわち冒頭に掲げた「史記疏證」60巻と合綴されたものである。この「漢書疏證」も写本で撰者名を欠き、沈欽韓の著と断ずることはできない。

以上の発表の要旨を「十萬卷樓旧蔵 静嘉堂文庫蔵「史記疏證」著者考」と題して、文教大学国文 第16号 (昭和62年3月20日発行) に発表して、著者を清の杭世駿と断じ、その考證を試みた。この時は、天下の孤本と信じていた。ところがもう一本、この世に存在することを知った。

1957年科学出版社から公刊された「史記研究的資料和論文索引」の中に、上海市歴史文献図書館が編纂した「司馬遷著作及其研究資料書目」の「稿本和未見傳本目録」に「杭世駿著 史記疏證 今顧頡剛蔵」とある。顧頡剛は蘇州の人、北京大学に学び、廈門大学、北京大学、燕京大学、中山大学、輔仁大学、雲南大学、齊魯大学、中央大学の各教授、北平研究院史学系主任を歴任、また禹貢学会を主宰した。中国科学院歴史研究所に所属、その中心的存在として活躍されていたが惜しくも1980年12月北京で逝去された。(享年87歳)「古史辨」(7冊)は、秦漢以来、古代史関係の資料を民俗学的立場から分析して、それらの性格や、成立事情に新しい見解を示した。いわゆる辨疑主義を展開したものである。その第1冊の自序(1926年)は、「古史辨自序」として、平岡武夫氏によって邦訳されたが(1940年)、当時の中国の学界の模様や研究者の実態を語る内容と、明快平易な文体によって、多くの読書子に親しまれた。又顧氏の校定した「資治通鑑」(1956年)は、古典定本の作制のモデルとして平岡武夫氏によって高く評価されている。特に「史記」については、民国25年(1936)顧頡剛

は徐文珊と史記白文之部第一冊至第三冊、加点校定を加え、国立北平研究員總辦事處出版課より出版した。又1959年—1978年中華書局編輯部校點併撰校勘記の「二十四史附校勘記」の史記130卷、顧頡剛等の校點本（1964年上海第4次印本1972年北京第5次印本）を北京中華書局排印本として刊行している。顧頡剛は古代史研究について独自の見解をもつ。たとえば伝説上の古代史の期間というものは、時代が後になればなるほど長くなるという。周代の人の頭の中にある最古の人は、禹であった。春秋時代の孔子のころになると、最古の人は堯や舜であった。続いて戦国時代になると、人々の頭の中の古人には、もっと古い黄帝や神農が現われた。その次の秦代になると、黄帝よりもずっと古い三皇が現われた。（顧頡剛口述中国史学入門・小倉芳彦・小島晋治監訳・研文出版の序言による）

顧頡剛のことについては小倉芳彦氏が詳しい。氏は中国古代史を専攻し、著書には「中国古代政治思想研究」（青木書房）「吾レ龍門ニ在リ矣」（龍溪書舎）「古代中国を読む」（岩波書店）「逆流と順流」（研文出版）「古代中国に生きる」（三省堂）「中国古代の學術と政治」（顧頡剛著 共訳 大修館）などがある。

小倉氏は「吾レ龍門ニ在リ矣」の「顧頡剛と日本」の章で、顧頡剛の人物・業績を詳細に批判的に紹介して興味は尽きない。

平岡氏によって大幅に改訳された「古史辨自序」が、「或る歴史家の生い立ち」と題も改められて、岩波書店から1953年に出版された。小倉氏の評に顔かされるものがある。

小倉氏の「抗日戦下の中国知識人—顧頡剛と日本—」（筑摩書房）には、顧頡剛の抗日戦下における活動及び顧頡剛情報の転変が詳しく語られ、顧頡剛の真面目が余すところ無く語られている。又第二篇の目録、西北考察日記は30年代の秘録ともいふべき貴重な資料で、小倉氏自ら「端なくも嗅ぎあてた鉞脈」と自画自賛する程面白いものである。

顧頡剛についていささか冗舌を弄した感を免れないが、実は顧頡剛の高弟としてその遺髪を継ぐと称しても決して過言ではない、社会科学院歴史研究所の研究員、劉起釞教授とはしなくも邂逅して、文教大学言語文化研究所に客員研究員として迎え、私と史記の共同研究をすることになったことの前置的意味もあることを了承してほしい。

生前の顧頡剛と親交のあった小倉氏は、未亡人とも連絡があったので、その旧蔵書の中に果たして「史記疏證」が現存するか否か、調査して頂くことを小倉氏に懇請した。その結果、未亡人から顧氏旧蔵書は社会科学院に入っていることの解答を得たが、「史記疏證」の存在については解答は得られなかった。

昭和61年8月、北京を訪れた時、北京大学に立ち寄る暇なく、たまたま北京大学に遊学中の安藤信広（法政大学教授）氏に託して「漢書疏證」の在否の調査を懇請していた。10月帰国された同氏からの報告によると、「日本で昭和14年（1939）吉川幸次郎等によって北京人文科学研究所蔵抄本から影印された「漢書疏證」27巻が現蔵されているのみで（図書分類番号2550 3510）、杭世駿の「漢書疏證」は今伝存せず」（北京大学中文系葛曉音助教授の調査に據る）ということであった。

こうなると、静嘉堂文庫にある「十万卷樓旧蔵漢書疏證」抄本は杭世駿の「史記疏證」抄本と共に天下の孤本ということになる。

この問題は、劉起釞教授の出現によって氷解する。

劉起釞教授が日本学術振興会の世話で、東京大学に招かれたのは、平成2年秋10月から12月迄三ヶ月間であった。かねて広島島の池田末利氏から手紙で私の恩師、小林信明博士に劉教授を紹介して尚書研究の便宜を計ってほしいとのことであった。劉教授の研究のテーマは日本に残存する「尚書」の研究資料の調査である。劉教授が来日すると、重ねて東京大学の池田知久教授からも要請があって、再度小林信明先生のお宅に劉教授を案内

した。通訳は講師の葉君海氏を患した。劉教授の宿舎にも訪問し、愛嬢劉曉瑜女史にも会った。ここで劉教授と私との「尚書」と「史記」に関する共同研究の企画がもち上がった。その時、私の脳裏にひらめいたのは文科大学の言語文化研究所のことであった。劉教授を言語文化研究所の伊藤建三所長に紹介したのは、劉教授が帰国直前の正月のある日のことであった。電話で予め劉教授の話を申上げ、共同研究を約したので、言文研の客員研究員の希望があるが如何なものかと相談すると、伊藤所長は大丈夫だろうと了承された。これがきっかけとなり、平成3年4月から平成4年3月迄言文研の客員研究員となり私と共同研究を続けたのである。

劉起釭教授は、1917年3月湖南省の生まれで、重慶国立中央大学（現南京大學）文學院歴史系を卒業（1945・7）南京国立中央大學文學部研究生修了（文學修士）（1947・8）南京國史館助修（講師）（1947・10）南京國史館協修（助教授）（1948・春）國史館が中国科学院南京史料整理処に改名、前後して整理組長、資料匯編組長（助教授待遇）となる。（1951・2）北京の中華書局編輯（助教授待遇）へ転任（1966・11）中国社会科学院・歴史研究所へ転任（1976・2）中国社会科学院歴史研究所研究兼研究生院教授（1979・一至現在）

主な業績を挙げれば、

「尚書評述」1985年齊魯書社より出版

「顧頡剛先生學術」1986年中華書局より出版

「尚書源流及伝本考」1987年遼寧大學出版社より出版

「尚書学史」1989年 中華書局より出版「史記夏本紀注釈今訳」が「史記注釈」に収録され、中華書局より出版

「古史統辨」1990年中国社会科学出版社より出版

上記の単行本の外、古史に関する論文を各雑誌に約50篇発表している。

小倉芳彦教授が顧頡剛の生前、研究室を訪れた時、傍に劉起釭氏が列席

していたことをその著書の中にも記し、長い交誼を示している。

1992年6月、小倉教授と語り、阿川修三助教授を事務局・会計担当とし「劉起釭教授を招聘する委員会を結成、次の方々のご協力を得たことを感謝する。石川忠久（二松学舎大学教授）内山知也（大東文化大学教授）小倉芳彦（学習院大学教授）青木五郎（京都教育大学教授）尾崎康（慶応大学教授）内山俊彦（京都大学教授）謡口明（文教大学教授）池田知久（東京大学教授）河内利治（調布学園短大助教授）楠山春樹（早稲田大学教授）加地伸行（大阪大学教授）加藤道理（桜美林大学教授）坂出祥伸（関西大学教授）戸川芳郎（東京学芸大学教授）中村俊也（筑波大学助教授）平勢隆郎（東京大学助教授）水沢龍夫（桐朋女子短大講師）村上哲見（東北大学教授）

中国社会科学院々長より許可を得て劉教授は平成4年12月3日来日した。

到着早々文学部紀要6号（平成5年2月刊行）に掲載する水沢との共同研究「静嘉堂與北京図書館蔵両「史記疏證」抄本初校記」の再校が待っていた。

これは、文学部紀要5号（平成3年12月印刷）「史記疏證抄本情況及其作者考略 劉起釭」に次ぐ「史記疏證」共同研究の成果である。

劉起釭教授の来日前から旅程の3月に予定せられた台湾大学及中央研究院出講は手続上日本から台湾へ出国することは困難なことが判明、一旦北京へ帰国して、大陸から台湾へ出国することに予定が変更され、急遽1月30日全日空機で成田空港を出立した。

帰国に当り次の五言古詩を墨書して下さった。

先生誠長者 推解義何隆 道義追前哲 襟懷展古衷 授勲明碩学 叙位見高風 寢饋龍門史 君成千載功 特成短句敬貽

文学博士水澤利忠教授 批正

一九九三・一月 於東京尊邸

- 先生誠長者 ○先生はまことに徳高き長者
- 推解義何隆 ○推食解衣（己が食を人にすすめ、己が衣を解いて人に与える）情誼何と厚いことか。
- 道義追前哲 ○先生は、崇高の道義を古代の賢哲に求め、
- 襟懷展古衷 ○高潔な襟懷もて古人の醇厚な衷腸を展べ、
- 授勲明碩学 ○国家は勲章を授けて碩学の學術を明らかにし、
- 叙位見高風 ○国家は勲位を授けて先生の高尚な風格を顕した。
- 寝饋龍門史 ○寝るときも食事の時も一切の精力を史記の研究にささげ。
- 君成千載功 ○君は千古不朽の功を建てた。
- 特成短句敬貽 とくに短句を成して敬みて貽る。

文学博士水澤利忠教授批正

一九九三・一月 於東京尊邸

(以下次号)